

曹操評価の変遷とその政治的意味 ——毛沢東の事例を中心に——

(東京大学大学院) 田中 靖彦

I. 関心の所在

中国古代史における重要人物の一人・曹操は、古来多様な評価を下された人物であった。筆者の関心は、今まで言及されることの少なかった近現代における曹操評価の分析にある。但し、ここで言う曹操評価とは、従来多く言及されてきた『三国志演義』⁽¹⁾などにおける曹操イメージではなく、政治的言説の材料としての曹操評価である。古来、中国では歴史人物への評価と政治は密接に関連してきた。前王朝の正史を次の王朝が編纂してきた前近代は言うまでもなく、批林批孔の例に顕著なように、それは近代以降の中国でも見られる現象である。そしてその中でも、前近代⁽²⁾から近現代に至るまでの曹操評価は、他の歴史人物と比較しても、自らを正当化する為の政治的道具という性格が特に強く認められる。

曹操を悪とする前近代の見方に対し異を唱えた代表人物として、魯迅・郭沫若そして毛沢東が挙げられる。魯迅による曹操再評価は「魏晉風土及文章与薬及酒之関係」⁽³⁾を通してよく知られているが、彼が主に文学的な面から影響を及ぼしたのに対し、政治的な面から最も大きな影響を及ぼしたのは、毛沢東であろう。郭沫若による曹操論は、後述の通り毛沢東の影響を強く受けている。毛沢東の曹操観に関する数多い文献⁽⁴⁾に共通しているのは、その内容がほぼ事実羅列に留まっていることで、何故毛沢東がそのような評価を下したのかといった分析は全くと言ってよいほど為されていない。宋培憲は毛沢東の曹操観に変化が見られることを指摘はしている⁽⁵⁾が、その政治的意図には言及がない。日本においては、尾鷲卓彦が毛沢東

が曹操をどう見ていたかについて若干触れた文章が先頃発表された⁽⁶⁾が、そこで指摘されていたのは毛沢東が曹操を賞賛したという事だけであり、毛沢東の曹操観に大きな変化があった点については指摘すらされていなかった。

本稿は、毛沢東による曹操観の変遷という歴史事実と、その政治的意図の分析、ひいては、彼の行った曹操評価の、中国における曹操評価の歴史の中における特徴の検証を目的とする。毛沢東は何故、かくも多く曹操を喩えとした発言を行ったのか、そして、幾度か変遷を遂げる毛沢東の曹操評価はどのような意図から来るものかについて、毛沢東が曹操について言及した記録を順を追って見ていくことで、分析を進めたい。

II. 少年時代の毛沢東

毛沢東は、簡単な本が読める程度に文字を覚えた頃、『水滸伝』と『演義』に夢中になり、農業の合間に暇を見つけてはこの二冊を読み耽り、1910年に県城東山学堂に赴く際の荷物の中にもこの二冊があった⁽⁷⁾という。『中国の赤い星』には、毛沢東自身が、教師の目を盗んで水滸伝や三国志を読み耽った学生時代を回想している記述がある⁽⁸⁾。毛沢東の発言に三国志に関連したものが多い原因がここに見いだせる。後の話になるが、毛沢東の発言に『三国志』⁽⁹⁾や『演義』等を引用したものが多いことから、「毛沢東の革命はマルクス主義ではなく、『水滸伝』『三国演義』を用いている」という批判を受けたこともある、と賀子珍が回想している⁽¹⁰⁾というから、その影響の深さが知れよう。ただ注意したいのは、彼が愛したのは史書『三国志』ではなく小説『演義』だったことである。

少年時代の毛沢東は、『三国演义』を歴史事実であると認識していた。R・テリル『毛沢東伝』⁽¹¹⁾は、この事に関して「歴史教師と論争したことがあり、教師側についたいかなる同級生にも叱責を加え、甚だしきに至っては椅子で殴った。(中略)小説論争に関して、遂に校長の所へ行ったが、この博識な校長も毛沢東の見方に賛成しなかった。毛沢東は湘郷県令に陳情書を提出し、校長を交替させるようお願いした。その陳情書には進退窮まった同級生に署名も強要している。」と述べている。

蕭子升は回想する。『『三国演义』は実際は三国時代の歴史を記録した本ではなく、歴史事実高度な芸術的な想像を加えた産物である。毛沢東少年はこの事に同意しようとしなかった。これは毛沢東の生涯に根を下ろした。』⁽¹²⁾

『演義』を史書と間違えるほど、毛沢東に『演義』の影響が濃かったことを示す逸話である。『演義』における曹操の扱いは、分かりやすく言えば悪人であり、毛沢東が曹操を敵に喩えた発言をする事例が多い理由が、ここに見いだせる。

Ⅲ. 敵としての曹操 ～1949年

1916年7月、袁世凱死後、大総統・黎元洪は、楊度らを帝政復活の重罪人として処罰した。その事について毛沢東は蕭子升に「奴らは以前は日の出の勢いだったが、今こうして惨めな末路を辿った。王莽、曹操、司馬懿、ナポレオン、メッテルニヒらは前車の轍と為すに不足なことがあろうか」⁽¹³⁾という手紙を送った。また、蔣介石が江西の共産党軍の拠点を包囲した1930年12月30日、毛沢東は当日の朝、濃い霧が立ちこめていたのを見て、朱徳に「天の助けだ。諸葛亮は東南の風で曹操軍を破った。今日我々はこの濃霧を利用し、敵を殲滅する！」⁽¹⁴⁾と語った。以上二つの事例は敵

を曹操に喩えたものであり、特に前者では曹操に対する相当の悪意が見て取れる。

1941年の皖南事変⁽¹⁵⁾の後、毛沢東は「三国時代、蜀は荊州を失い、劉備は陸遜の火攻めに遭い七百里を焼かれた。これは劉備が主要な矛盾と小さい矛盾の区別をしっかりとつけていなかったからである。諸葛亮の隆中对での戦略は『東連孫呉、北拒曹操』である。曹・劉こそ主要の矛盾で、孫・劉はその次に過ぎない。(中略)だが劉備はこの事を分かっていなかったで、『呉と結び、理とけじめを以て荊州を治める』ことを全くしない関羽を守りに置いた。(中略)やがて関羽は殺され、劉備は百官の諫めを聞かず大敗を招いた。』⁽¹⁶⁾と発言した。毛沢東はこの発言で、共産党を劉備の蜀、国民党を孫権の呉、日本を曹操の魏に喩えている。無論これは曹操を悪として喩える毛沢東の考えを示していると見るべきである。国民党を孫権、自分を劉備に喩えるところに、皖南事件で殺された同志を関羽に見立て、その仇討ちを誓ったという可能性もある。この比喩が、当時の共産党が一地方勢力に過ぎなかったことから来ているのは言うまでもないが、これには東晋や南宋といった地方勢力が曹操を中原を席捲する異民族になぞらえて憎んだのと同様のものが感じられる。『人民日報』にも「徐庶⁽¹⁷⁾に学び、曹操(国民党反動派)の為に働かないようにしよう」⁽¹⁸⁾と、曹操を国民党反動派に喩える記述が見られるが、これは毛沢東の意見の影響であろう。

以上を見ると分かる通り、毛沢東は、打倒すべき敵の比喩として曹操を用いている。明確に曹操を敵視した内容ではない発言もあるが、それらも曹操が敵であることが前提となっているものが多い。彼がこのように曹操を敵に喩えたのは、言うまでもなく大衆の中にある曹操を悪と見なす概念に訴えるための手段であるが、同時に、彼自身の建国までの立場は劉備同様、曹操に比するだけの敵(日本、あるいは国民党)がいたことも大きい。

IV. 偉大な歴史人物としての曹操 1949～59年

ところが、以上のような曹操を敵あるいは悪として論ずる傾向が建国期から徐々に変わってくる。

『南史』巻五十八・韋叡伝に、梁の武帝に仕えた知勇兼備の名将・韋叡が城を築き敵を防いだ時に「将たるもの、時には恐れることも必要である」と言ったという記述がある。1952年、これを読んだ毛沢東は「この韋叡の発言は曹公の言葉である。これを聞かなかった夏侯淵は命を落とすことになったのだ。」¹⁹⁾と言っている。これが恐らく毛沢東が曹操を「曹公」と呼んだ初めであろうとされている。「公」という敬意を込めた呼称には、それまでの毛沢東の曹操に対する発言とは異なる感覚が見られる。

1953年、林彪が医師の診察を受けた。葉群がその医師に病氣と診断するよう言ったが医師は応じず、診察の結果、林彪には特に大きな病氣は無く、健康な生活を送れば即座に治ると診断した。医師はそれを毛沢東に報告し、加えて、毛沢東からも勧めるようにと願い出た。毛沢東は林彪に、自ら書した曹操の「亀雖寿」²⁰⁾の詩を贈った²¹⁾。「亀雖寿」は曹操の代表作の一つ「碣石篇」²²⁾の第四解であり、その雄大な志をよく表したのものとして有名で、部分的に現行の中国の中学歴史教科書にも載せられている。毛沢東の意図は「盈縮之期、不但在天。養怡之福、可得永年」(人の寿命の長短はただ天命によるものではなく、体を健康に保つという福を以て長生きすることができる)を林彪に諭すことにあったと思われる。悪人の詩を送りつけるつもりだったとは想像しにくく、この頃の毛沢東には少なくとも曹操を敵として扱うことを見直す意図、そして文学者としての曹操を知らしめようという意図があったと見て良い。

1954年、江青・李敏らが北戴河を訪れ、その様子を手紙に書いた。毛沢東は返事に「そこは曹操の至った場所であり、彼の『碣石篇』は有名で読

む価値がある」と言った²³⁾。また、同年夏、毛沢東本人も北戴河を訪れ、曹操の「観滄海」²⁴⁾を詠じた。主治医である徐涛が尋ねた。「それは誰の詩ですか?」「良い詩だろう?」「気概があり、美しいですね。」「これは曹操の詩だ。」「曹操は詩を作れたのですか?」「おい、お前は大学生だろう。補習が必要だな。曹操は傑出した軍事家・詩人・政治家だった。」今まで曹操の肯定的な話を聞いたことが無かった徐涛は大いに驚き、戸惑いながら尋ねた。「曹操? どの曹操ですか?」「他に曹操がいるのか? 三国時代の曹操だ。」「え? 彼は白臉²⁵⁾の奸臣ではないのですか?」「無知な奴め。曹操は北方を統一し、魏を建てた。彼は多くの悪政を改革し、豪族を抑え、生産を発展させ、屯田制を実行し、開墾を推進し、法治を推し進め、多大な損害を蒙った社会は安定・恢復・発展を始めた。これは肯定すべき事ではないか。たいしたことではないか。曹操が白臉の奸臣だと、書物も、劇も、大衆もそう言う。これは封建正統概念の生んだ冤罪である。そして反動士族らの書いたものも封建正統を維持している。これは改めねばならない。」毛沢東は徐涛に以上のように語り、「気魄雄偉、慷慨悲涼し、正しく男子、大作家である」と絶賛し、「浪淘沙・北戴河」²⁶⁾を詠んだ²⁷⁾。また毛沢東は、魯迅の「魏晉風度及文章与藥及酒之關係」(前述)を読み、曹操を賛美する部分を太く赤い線を引き、魯迅の曹操への見方を賞賛している²⁸⁾。

以上の流れから、毛沢東の曹操観は、建国を挟んで180度転換したことが分かる。建国前は打倒すべき敵の比喩としての曹操であり、建国後は、見習うべき英雄、封建主義の下で謂われのない蔑視を受けてきた人物としての曹操である。毛沢東は、共産党政権の正当化の為に、封建体制の下で曹操が受けてきた悪人の汚名を晴らすことを訴え、それにより曹操を封建体制否定の道具として利用したのである。毛沢東の曹操評価が180度変わったのは、毛沢東の立場自体が今までと180度

変わったからに他ならない。中華人民共和国を建てた彼は、曹操と同様の最高権力者になったのである。彼が曹操の才能を讃えその功績を賞揚するのは、則ち毛沢東自身の肯定と賞賛だったのである。毛沢東が曹操を評した「軍事家・詩人・政治家」という形容は彼にも当てはまる。曹操の「碣石篇」を紹介し、自身も「浪淘沙・北戴河」を吟じたことは、曹操の詩人としての一面を広く知らしめる効果があると同時に、毛沢東もまた曹操に劣らぬ詩人であるという宣伝効果も十分であったことも疑いない。また碣石は、始皇帝が訪れ「碣石門刻石」を作った（『史記』巻六・始皇帝本紀。「秦皇島」の地名はここから来ている）地でもある。曹操の「碣石篇」には、自らを始皇帝らに比する意図があったという推察が成り立つが、毛沢東の「浪淘沙・北戴河」は、作中に「魏武」「秦皇島」という表現が有ることからも、自らを曹操のみならず始皇帝に比した意図があると推測できる。彼によって為された始皇帝再評価との関連も指摘できよう。

毛沢東の曹操を賞賛する度合いは、更に強くなっていく。1957年4月10日、毛沢東は『人民日報』責任者と語り「小説の曹操は奸雄だが、こういう『演義』を信用してはならない。実際には曹操は悪人ではなく、当時曹操は進歩を代表する人物であり、漢は没落していたのである」と語った²⁹。また同年11月2日、毛沢東はモスクワ訪問期間中のある晩、胡喬木・郭沫若らと呼び共に夕食を取り「『三国』を語り、涙を流し、古人と憂いを分かち合おうではないか」と語った。そして通訳の李越然に問うた。「曹操と諸葛亮、どちらがより凄いか、言ってみよ」李越然は何と答えて良いか分からなかった。毛沢東は言った。「諸葛亮の用兵は無論、知謀に長けたものだ。しかし曹操も大したものだ。劇はいつも彼を白臉の悪人に仕立てあげるが、これは全く冤罪である。曹操という人物はとても大したものだった。」³⁰

これらの言動からは、曹操を公に再評価する為の下地を築く様子が窺える。そして毛沢東はこういった準備を整えた上で1958年、公の場で曹操再評価を訴えるのである。

1958年、毛沢東は会議において、「殷紂王は文学と軍事に精通していた。秦始皇帝と曹操は悪人として見られてばかりだが、これは不正確である」³¹と発言し、また中央工作会議の前日の11月20日、武漢東湖の湖畔で座談会を開き以下のように発言している。「諸君は『三国志』と『三国演義』における曹操像は全く違っていることを知っているか。」その場に居た一人が「一方は誹謗で、一方は賞賛である」と言うと、「その通り。『三国演義』は曹操を奸臣として描写したもので、『三国志』は曹操を歴史上の肯定的人物として描写し、その上、曹操こそまさに非常の人、超世の傑であったと言っている。『三国演義』は通俗的で生き生きとした描写から多くの読者を得、昔の劇は皆『演義』を種本として書かれたものであるから、舞台の曹操は白臉の奸臣であった。これは我が国では皆の知る所といって良いだろう。今、曹操の名誉回復は必須である。我々中国共産党は、真理を重んずる党である。凡そ誤謬と呼べるものは、例え10年、20年、いや1000年、2000年かかろうとも正さねばならない。（中略）曹操を奸雄だと評するのは封建正統論が生み出した冤罪である。これは覆さねばならない。」と言った³²。陶魯笏は「我々は皆、主席が語るのは明日11月21日に始まる中央工作会議と引き続き召集されている六中全会の問題についてだと思っていた。主席が親しげに我々を招聘し座席につくや開口一番「今日は皆と陳寿の『三国志』について語りに来た。」と言うなどと、誰が予想したろうか」³³とその驚きを回想している。毛沢東が会議の始まる前日にわざわざ召集をかけたことから、この毛沢東の史書重視及び曹操賞賛の発言は、単なる気まぐれではなく明確な目的を持ったものだと思えるべきで、ここに至って

遂に毛沢東は「曹操悪人説」への反論を公的に発言したことになる。

以上のような曹操への全面的な賞賛は、大躍進政策の始まる1958年前後と時期的にはほぼ合致しており、曹操を己の政策の正当化のための道具に用いようという意図が見て取れる。幼少時より『演義』に親しみ史実と誤解していたことを既に述べたが、そのことを考えても、彼の曹操観の突然の変化には単なる人物評価の転換という枠では捉えきれない意図が包含されていると見るべきであろう。そのことは、曹操以外の三国時代の人物への評価を見てみるとより鮮明となる。同年の毛沢東は張魯³⁴⁾について言及することが多い。中でも、張魯の五斗米道が義捐の米肉を義舎にぶらさげ、旅人が自由に食べられるよう提供したこと（『三国志』巻八・張魯伝）に対して「人民公社の先駆け」と絶賛した³⁵⁾ことはよく知られている。その目的は、言うまでもなく大躍進政策の理論武装の補助である。同年は大躍進運動が開始された年であり、8月の党中央政治局拡大会議にて、人民公社の設立と鋼鉄大增産などが決議されていることから分かるように、毛沢東は自分の進める政策の正当化に張魯を用いたのである。このように、同時期の毛沢東による歴史人物評価には、自己とその政策の正当化という政治的意図が顕著に見てとれる。彼の曹操評価には特にその性格が強いことは、既に述べた通りである。

1959年は毛沢東にとって正に内憂外患の年であった。国内では4月に劉少奇が国家主席に選出され、7月には廬山会議で彭徳懷との対立が表面化し、秋には深刻な食糧難が発生し大躍進政策の失敗が誰の目にも明らかになり、外交面ではフルシチョフ訪中によりソ連との関係が悪化していた。そのような情勢下、北京では劉少奇を中心に国民経済の再建が進められ、毛沢東は北京では意志を通すことができなくなっていた。

以上のような苦しい情勢の中で毛沢東は、郭嘉³⁶⁾

について語ることが多くなる。4月、「皆が『三国志』の中の『郭嘉伝』を読むことを希望する」³⁷⁾と述べたのをはじめ数回に渡り郭嘉の権謀術数を讀え、黨員にその知謀に学ぶよう説いた。また彼は、廬山会議開催中の7月11日、曹操が郭嘉の才能を愛し、赤壁の敗戦後に「奉孝（郭嘉）が生きておればこのようなことにはならなかった。」とその夭折を悼んだ言葉（『三国志』巻十四・郭嘉伝）を引用³⁸⁾した。そして彭徳懷による毛沢東宛の書簡が提出された14日を挟んで、17日、彼は袁紹と曹操を比較して論じ、曹操が袁紹について優柔不断であると評した（『三国志』巻一・武帝紀）ことを踏まえ、袁紹は将を用いる事が出来なかったと評し³⁹⁾、また郭嘉が袁紹を見限ったことを挙げている。陶魯筋が「（毛沢東が）話す『三国志』中の多くの人物で、最も多く語ったのが曹操と郭嘉である」と回想している⁴⁰⁾ことから、相当な引用頻度だったことが分かる。内外で危機に直面した毛沢東が自分を曹操に喩え、郭嘉のような優秀な参謀を欲していたという見方が出来る。

思想の違いから来た彭徳懷との対立は、この廬山会議で表面化した。毛沢東が袁紹の優柔不断を例示したのは、彭徳懷への批判を込めてのものであろう。また、推論の域を出ないが、郭嘉の早世を惜しむ曹操を挙げた発言からは、朝鮮戦争の中、若くして戦死した息子・毛岸英のことが連想される。彭徳懷は、人民志願軍司令として朝鮮戦争を指揮した。毛沢東は、政治的意図を以て曹操を例示したのみならず、息子を亡くした父親として、郭嘉の夭折を毛岸英の戦死の暗喩として用い、自分を曹操、亡き息子を郭嘉に喩え、我が子を守ってくれなかった彭徳懷を責めたという見方も可能であろう。

V. 1959年の「曹操翻案」議論

1959年は、曹操に関する議論が活発になった年でもある。郭沫若「談蔡文姬的《胡笳十八拍》」

(『光明日報』1月7日)、翦伯贊「應該替曹操恢復名譽」(『光明日報』2月19日)、郭沫若「替曹操翻案」(『人民日報』3月23日)という連続した曹操翻案文章の発表は広大な反響を呼んだ。また郭沫若は同年、歴史劇『蔡文姬』を編み、その目的を「曹操の名譽回復にある」と断言している⁽⁴¹⁾。これらの中でも著名なものは郭沫若「替曹操翻案」で、同文書にて彼は「曹操は黄巾を討ったがその意義に反していない⁽⁴²⁾。(中略)曹操は民族の発展と文化の発展に大きな貢献をした。曹操の人民に対する功績は大きく、諸葛亮は曹操と比べれば為したことは小さい。曹操が歪曲を受けたのは正統概念による統治のせいである」と全面的に曹操を賞賛し「曹操は千年に渡って冤罪のまま反面教師を務めてきた。今日こそ彼の名譽を回復せねばならない」と締め括っている。前述の通り、郭沫若は1957年に毛沢東から直接、曹操を賞賛する発言を聞いており、上記の郭沫若の見解は、発表時期、内容を照らし合わせると、多分に毛沢東の影響を受けていると見て間違いない。特に「曹操の烏桓平定は反侵略性の戦争であり、人民の支持を得たものであった。毛主席が北戴河にて詠んだ『浪淘沙』は曹操の烏桓遠征を題材としている。毛沢東が詩を書く際に種々の客観的な相似性から曹操を想起したこと、曹操の烏桓征討を想起したことは、大いに注意して見るべき所である」という一節は、この曹操賞賛が毛沢東の意思であることを述べているばかりでなく、毛沢東が曹操に劣らぬ詩人であることををも宣伝している。

しかし郭沫若が最初から曹操を肯定的に見ていたかというそれは否である。『人民日報』に以下のような郭沫若の発言が載っている。

中国内戦は元はと言えばアメリカの対中国政策が悪い。彼らは世界を制覇し市場を独占しようとし、我々中国人を外敵の脅威に直面させた。それでいて彼らは、中国人が自殺しあっている

などと言う。…良いだろう。我々中国人は馬鹿ではないぞ。もし中国人が自殺しているというなら、武器を与えたのは誰だ！私は、借刀殺人(刀を貸して人を殺す。自分は手を汚さずに他人を利用して相手を始末すること)する曹操を憎む！⁽⁴³⁾

戦時中の毛沢東は日本を魏と喩えていたことは既に述べたが、上記の記事が発表された当時、郭沫若はアメリカを曹操に喩えたことが分かる。郭沫若の曹操論は一般的には賞賛しか知られていないが、彼は建国以前には曹操を敵の代名詞として用いていたのであり、上の文を見てもアメリカへの憎しみと同時に曹操への感情もむき出しになっている。

ともあれ、郭沫若の提唱した曹操名譽回復論は多大な反響を呼んだ。翦伯贊の論は更に過激な内容で、曹操を全面的に肯定し、『演義』は曹操の誹謗書に過ぎない」とまで言っている⁽⁴⁴⁾。これには反対の声が強く、李希凡是「曹操の再評価に対しては特に言うことはないが、それに伴う『演義』の全面否定の動きには、『演義』の一ファンとして同意できない」⁽⁴⁵⁾と言っている。多くの学者が郭沫若の意見を更に掘り下げ、その意見は実に多岐に渡った。曹操に対し肯定的見解を述べる学者は多く出たが、反駁も多く、特に郭の「曹操は黄巾を討ったが、その理想に背くものではなかった」という主張には批判が多かった。譚其驤は、「曹操は四つの功績、四つの過ちのある人物」⁽⁴⁶⁾と唱え、罪状の筆頭に黄巾を討ったことを挙げ、他にも「屯田は確かに人民にとって利点もあったが、実際には軍民の農奴化への道だった」と指摘する。また曹操の烏桓平定については「侵略戦争」と批判する意見や、「功績ではあるが大したものではない」という意見も出た。

1959年の1月から7月末までに発表された曹操に関する論文の数は130余りにものぼり⁽⁴⁷⁾、議論は

紛糾したが、一致した意見は出なかった。同年の曹操論は、郭沫若・翦伯贊・李希凡など、名だたる知識人によって為されたものであることも指摘できるが、郭沫若による曹操の名誉回復の主張は、論文発表の直後は相当の反対意見があった。つまり、59年に起こった曹操に関する議論では毛沢東の曹操観への賛同者が多くはなかったのである。それは、『演義』的な観念が根強いとも言えるが、当時の毛沢東の影響力の弱さから来ているものという考えも出来る。彼は彼に忠実な郭嘉を欲していたのである。更に考えれば、毛沢東に代わり国家主席になった劉少奇や、廬山会議で自分に対し明確に反対の姿勢を取った彭徳懷らを袁紹に喩えている可能性もある。そして、徐々に実権を失っていった毛沢東の発言からは、この後曹操に対する肯定評価が一時的に影を潜めるようになる。

VI. 10年の沈黙 1960～70年

1960年、毛沢東は以下の談話を発表した。「三国時代、張昭は一代の経学家であり、呉における読書家・学問のある人物であった。だが曹操が目前に至った時には動揺し和議を主張した。周瑜は彼より若く、呂蒙は粗忽であったが、抗戦を主張したのは彼らだった。魯肅も読書人であったが、彼もまた戦を主張した。このことから分かるように、読書しているかどうか、文化があるかどうかだけで問題を判断するのでは駄目なのだ。」⁽⁴⁸⁾ また1962年2月15日、毛沢東が『撃鼓罵曹』を見たという記録が残っている⁽⁴⁹⁾。1964年には、談話の中で「今こそ、青年幹部を抜擢せねばならない。赤壁の戦いで、群英会での諸葛亮は27歳、孫権も27歳、孫策が事を起こした時は僅か17、8歳、周瑜が死んだ時も僅か36歳であり、(赤壁戦) 当時は30歳前後に過ぎず、魯肅は40歳、曹操は53歳だった。実際、青年たちが老人を破ったのである。長江の後浪は前浪を押し、世上では新人が旧人を追うのである。」と語った⁽⁵⁰⁾。

この数年の言動の中には、曹操を再び敵として扱うものが見られる。『撃鼓罵曹』は、奇人ではあるが清廉の士である禰衡が逆賊曹操を満座の席で罵るという内容の京劇であり、観劇した毛沢東の反応は記述には残っていないが、わざわざ見に行った事が記録に残っていることに何か意味するところがあるとも考えられる。また、青年の抜擢を訴えた一連の発言だが、若手の必要性を訴える発言は、毛沢東が人材を欲していたという点において59年の郭嘉に関する発言と共通している。更に共通点を挙げるなら、郭嘉もまた曹操配下の中で若手であった。しかし、三国時代の歴史という観点から見れば、自分を郭嘉を欲する曹操と喩えるか、曹操を撃退する知恵者を欲する呉あるいは劉備と喩えるか、という大きな差がある。「若者」と強調するところに、間もなく始まる文化大革命での紅衛兵支持、あるいはこの時期に見られる林彪の地位の上昇との関連性が見いだせる。紅衛兵は学生という若者による組織であり、また林彪は1908年生まれであるから、「2、30歳の群英会の英雄」というほどではないが、劉少奇や彭徳懷らよりは10歳ほど若手である。毛沢東の「若手を抜擢すべし」という発言には以上のような含意があるといえる。

1965年、毛沢東は言った。「今までは舞台の上で、曹操・趙子龍・張飛や帝王らが駆け回り、民衆は脇役に過ぎなかった。今や、それは改められるべきであり、労働人民こそが主役を務め、舞台上で駆け回らねばならない。昔の劇での帝王や將軍、宰相などは一掃しよう。こうしてこそ初めて現実に合致するのである。」⁽⁵¹⁾ 同年は上海で『海瑞罷官』批判が起こった年である。演劇界への影響については別の機会に述べるが、この姚文元による『海瑞罷官』批判は、北京では主導権を失っていた毛沢東にとって、上海において彼に忠誠を誓う「若手」が遂に北京という「舞台」から「曹操を一掃する」活動を開始したことを象徴するもの

であった。そして翌年には文化大革命が始まるのである。以上のような毛の発言は、文化大革命及び権力再奪取の為の下準備と見るべきであろう。

1970年4月下旬、毛沢東は中共中央政治局会議で、自分が国家主席にはならない意志を告げ、『三国志』巻一・武帝紀の注『魏略』の故事を引用して「孫権は曹操に皇帝になるよう勧めたが、曹操は、孫権は私を炉の火の上に置き焼こうとしていると言った。諸君に忠告するが、私を曹操にしようとしないうに。また諸君も孫権になるな」と発言した⁵²⁾。毛沢東は同年3月に、劉少奇の死亡以後空席だった国家主席の地位の廃止を提案している。林彪は毛沢東に対し、何度も国家主席に就任するように願い出たが毛沢東はそれを拒絶し、上に挙げた発言を通して自分は国家主席にならないと宣言したのだった。林彪が毛沢東に主席就任を願い出たのは、林彪自身が国家主席の地位を望み、毛がその廃止を提案したことに焦ったからだという⁵³⁾。

毛沢東の発言についてだが、曹操は孫権・陳羣らの勧めを断り帝位に即かなかったのだから、「私は曹操であり続ける」と言った方が寧ろ意味が通る。そう言わなかった原因として考えられるのは、『魏略』に続き注として引かれる『魏氏春秋』の記述である。夏侯惇が即位を勧めたのに対し曹操は「天命が儂にあらうと、儂は周の文王になろう」とそれを退けたという記述（『三国志』巻一・武帝紀注『魏氏春秋』）で、これも『演義』はそのまま採用している（78回）。これに対しては「息子の代で漢に取って代わる野心を示す言葉」という批判⁵⁴⁾もあり、「私を曹操にするな」という発言はこの批判を踏まえたものと見ることもできる。即ち、毛沢東は自分の後継の地位を固めたいという林彪の思惑を見抜き、「自分は曹操と違い、後継の地位にあるお前を皇帝（国家主席）にするつもりはない」と宣言したという解釈が成立する。1958年を始めとして幾度となく曹操を称賛し、自

分をなぞらえてきた彼はここに明確に「私を曹操にするな」と公言したのである。

今まで見てきた通り、1960年からの約10年に渡る曹操への肯定評価が止む時期は、廬山会議（1959）から文革前期と一致する。大躍進の失敗などからいったん最高権力者の地位を明け渡さざるを得なくなった毛沢東には、再度打倒すべき存在が登場し、その敵の比喻として曹操を用いるという、建国前と同じ手法を用いたと考えることができる。そう考えると、1960年から10年間、今までと打って変わり曹操を称賛する内容の発言が全く見られないことも納得がいく。特に1965年の発言は、労働者を主役、曹操をその敵というように対立的な存在として喩えた発言であり、再度毛沢東は曹操を人民の敵として喩える発言をしたという重要な意味を持つ。

以上に挙げた毛沢東の言動を、「毛沢東は中国人が日常的に用いる故事成語や常套文句を用いたに過ぎず、その中で曹操が敵役になっているからと言って、毛沢東自身が曹操を意識的に貶した証拠にはならない」と片づけるのは容易である。しかし、既に見てきた通り、曹操を賞賛した時期（1949-59）の毛沢東が、曹操を悪として扱う故事成語の類を用いたという記録は見えない。これを見ても、同時期や建国以前の毛沢東が曹操を敵と扱うことに何ら違和感や抵抗を覚えなかったことは確かである。加えて本章で行ってきた分析を考慮すれば、同時期の毛沢東は意識して曹操を悪と扱ったと見るべきであろう。

VII. 批林批孔と法家としての曹操 1970年～死去まで

60年代から70年代、特に文革末期には、批林批孔、儒法闘争といった、歴史研究を対立勢力の攻撃の道具として用いる影写史学（あてこすり史学）が多く見られる。影写史学において、曹操像は盛んに利用された。1973年頃より法家肯定が、74年

1月には江青らにより批林批孔運動が始まるのとはほぼ時を同じくして、1974年以降、曹操を論ずる文章がにわかに増えてくる。法家としての曹操を評価する論文⁵⁵⁾や『郭嘉伝』を挙げる論文⁵⁶⁾が相次いで発表された。これらの特徴は皆一貫して曹操を法家として賞賛していることで、嘗て1959年に見られた多様な議論とは対照的である。この現象は即ち、曹操への評価が批林批孔という政権の意図の影響を露骨に受けたものになっていることの表れであり、特に『郭嘉伝』を挙げる論文は1965年の毛沢東の「郭嘉に学べ」という発言の影響が顕著である。また、荀彧の死⁵⁷⁾に関する論文⁵⁸⁾が見られたのは興味深い。その意図が林彪を荀彧に喩えることだったのは明白である。同論文の展開する「荀彧の思想は法家思想であり、儒家思想ではなかった。だが儒家の影響から脱しきれなかった所が荀彧の限界であり、決して曹操によって死に追いやられたのではない」という露骨な曹操弁護は、曹操を毛沢東、死に追いやられた荀彧を林彪に読み替えるとその意図が明確に見て取れる。上に挙げた多くの論文を掲載した雑誌のうち、『歴史研究』は毛沢東の指示で復刊したもので、『学習と批判』は四人組の雑誌であったことや、これらの論文の多くが、毛沢東やマルクス、エンゲルスらの語録を引用して論を進めている⁵⁹⁾ことから、これらの論が毛沢東や当時の党中央の政治的意図の影響を強く受けたものであることが分かる。この動きは学会のみならず、児童向けの本においても見られた。1975年刊行の『曹操的故事』は、巻頭に『毛語録』の抜粋「我々の歴史遺産を学び、マルクス主義の方法を用いて批判的な結論を与えること、これが我々が学ぶもう一つの任務である」を載せた上で、「前言」にて「本書の故事の大部分は曹操の法家思想の側面を反映し、儒法闘争に関する重大な事件を扱ったもので、曹操の紹介と評価が目的ではなく、まして曹操の伝記ではない。(中略)歴史から無産階級専制を

強固にするのに有益な経験・教訓を総括し、無産階級専制下において革命と戦闘を継続しよう」⁶⁰⁾と述べている。同書は曹操の生涯を物語風にまとめたもので、活字は比較的大きく、挿し絵も豊富であり、裏表紙には「少年児童歴史読物」とある。このような子供向けの本であっても、曹操を共産主義の正当化と儒家(政敵)攻撃の道具として用いる傾向が強く認められる。

最晩年の毛沢東は、これらの動きと呼応するように、再度曹操を肯定的に述べるようになる。1975年、毛沢東は「漢末に大分裂が始まり、黄巾起義は漢代の封建統治を打ち壊し、後に三国が形成された。これは統一へ向けた発展である。三国の政治家・軍事家らは皆統一に対し貢献があったが、曹操の功績が最も大きい。司馬氏がひとたび統一を完成したのも、主に曹操がうち立てた基礎によるものである」⁶¹⁾と発言し、1976年には、談話の中で、孔子・秦始皇帝・曹操・朱元璋らが大学に通ったことが無い事を用いて、「実践の中で初めて才能を伸ばすことが出来る」と説明した⁶²⁾。これは模範として曹操を挙げた発言と解釈できる。これが調べた限りでの、毛沢東が曹操について言及した最後の言葉である。最晩年には再度曹操を明確に肯定する発言で落ち着いた観があり、最後に再び中国大陆最高権力者＝曹操に返り咲いたことへの安心感すら感じられる。こうして毛沢東は最後には、曹操を再度高く評価してその生涯を終えていることが分かる。

VIII. 毛沢東の本心の曹操観に関する一考察

毛沢東が本心では曹操をどう見ていたのかについて少々論じてみたい。毛沢東が『演義』を史実と誤解するほどその影響を色濃く受けていたことを考えると、建国前の彼が曹操を敵と喩えてきたのは、彼の心中と一致するところであったろう。翻って、建国以後に突然曹操を高く評価したのは、政治的意図こそあれ、本心から曹操を賞賛するつ

もりがあったかについては、多分に疑わしい。現に1960-70年には再度、曹操賞賛が影を潜め、三国志に題を取った譬え話などではやはり諸葛亮が曹操を破る話を引いてしまう。彼もまた一般の中国人同様、『演義』の影響力を強く受けた人物であった。

それでも、1975年という死の直前に再度曹操を高く評価する発言が見られたことは注目に値する。彼は1975年秋から死去までの一年間、古い京劇をフィルムに収めさせ、それを好んで鑑賞したという⁶³⁾。その収録された38の演目のうち明らかになった7つの演目は全て歴史劇であり、『古城会』『斬馬謖』など『演義』を題材としたものも含まれている。文革期、革命劇を推進し多くの歴史劇禁止を働きかけてきた彼だが、死を前にして最期にはやはり好きな歴史劇を見たかったのではないか。最後には本音を、ということなのだろうか(同発言において、孔子も評価していることも注目されよう)。この時期が丁度、最後に曹操を評価した時期と符合するのは実に興味深い。だとすれば、毛沢東の曹操に対する見方は最後には心から肯定的なものになっていた、ということも十分に考えられる。

IX. 最後に ——毛沢東の曹操評価の歴史的 위치づけ——

年代を追って毛沢東の曹操評価を追い、彼が曹操評価を己の正当化に用いたことを見てきた。毛沢東は小さい頃から『演義』を通して三国時代に深く馴染んでいたが、無論『演義』の影響を深く受けたのは彼一人ではなく、『演義』や戯劇を通じて三国志物語とその登場人物が中国の大衆に深く根付いていたことは想像に難くない。毛沢東に三国志を用いた発言が多いのは、大衆に分かりやすく、しかも影響力を持つものだったからであろう。冒頭で提起した「毛沢東が曹操をかくも多く用いた理由」の答えもそこにある。悪人という印

象の強い曹操を敵として例示すれば聞き手も容易に理解できる。また、そのような曹操を称揚することは、今までの定説を覆すものであり、前近代的な価値観を打破する宣伝効果は申し分ない。また、曹操は最高権力者にまで登り詰めたが、人民中国にとって憎むべき存在である皇帝になっていないことも、毛沢東にとって都合が良かったのであろう。毛沢東は、旧体制打破の象徴として曹操を用いるばかりでなく、それを自らになぞらえることで、自らを新しい中国の象徴として確立することに成功したのである。

毛沢東による曹操評価は現在でも少なからぬ影響を持っており、そのことは中国における現行の中学生用の中国史教科書に顕著である。その曹操に関する記述は称賛一方に偏り、嘗ての郭沫若の論をそのまま転用しているようにすら見える。また興味深い事例として、唐家璇の以下のような発言がある。

『三国志』の中に曹操を形容した言葉がある。則ち「挟天子以令諸侯」(皇帝を擁して大義名分を手中にし、諸侯に号令すること。曹操の基本戦略の一つ)である。現在、台湾には「挟天子」して自らを守ろうとする者がいる。その目的は統一を遅らせ、祖国を分裂させたままにしようというものである⁶⁴⁾。

曹操を悪として扱った発言であり、毛沢東による肯定的な曹操観との乖離が指摘され得るが、ここで注目すべきは、現在の中国政府も、自らの正当化に曹操という歴史人物を政治的言説の道具として用いる傾向は毛沢東と変わらないということである。

では、毛沢東の曹操評価はどのように位置づけるべきか。既に見てきたように、曹操評価という事象は前近代から現代に至るまで、程度の差こそあれ理論武装の補助の為に用いられる、政治的言

説の道具という性格が強い。そして、毛沢東による曹操評価もその枠の中で捉えられる。彼もまた、歴史人物への評価を現在の言説として利用するという中国古来の伝統の忠実な実践者であり、彼の曹操評価はそれが顕著に見て取れる好例である。彼は前近代において曹操が悪人と評されたことを「封建正統概念の生んだ冤罪」と批判し、歴史に対する功罪から曹操を評価する姿勢を取ったが、毛沢東の曹操評価は、自らを正当化する為の政治的道具として曹操を用いたという点では彼の批判する「冤罪」と何ら変わるところは無かったのである。

但し、毛沢東の曹操評価がそれまでと決定的に違う点は、それが彼の生涯の中で劇的に、しかも複数回にわたって変化するという不安定さを持っていることにある。これは無論、毛沢東個人の立場が大きく変わったことが最大の要因であることは言うまでもないが、中国内部、及びそれを取り巻く環境の劇的な変化もまた無関係ではないだろう。儒教道徳を中心とした価値観や歴史観が長く続いた前近代に比べ、様々な価値観が外部から流入した近代以降の中国では、歴史及び人物を議論する要素や基準もまた劇的に変化していった。毛沢東はそのような中国の激動する歴史観を利用し、時として彼自身が歴史観を創造さえた。彼の曹操評価は、その端的な例としても解釈できる。

また、歴史学的見地から見た場合、早くから毛沢東への追従の立場を取った郭沫若の曹操評価に加え、1959年には多様な面を見せていた学術界における曹操評価が、批林批孔期における異様なまでに一様化した曹操論へ変容してゆく事例からは、権力者・毛沢東による歴史学の政治的利用という現象と同時に、歴史学が毛沢東へ迎合し取り込まれてゆく様子、言い換えるならば、毛沢東という権力者による歴史学の掌握という事象が見て取れる。

しかしながら、それまで悪人という印象が強か

った曹操を、史書を元に分析するなど歴史学的に捉えなおし、それを広く知らしめたのが毛沢東であることは確かである。それまでにも章炳麟のように曹操を歴史学的見地から評価しなおそうとする動き⁶⁹はあったが、大きな影響力を持つには至らなかった。しかし、歴史学的には皮肉なことながら、政権による歴史学への強い介入ゆえに、曹操再評価の動きは多くの人の知るところとなった。曹操再評価を提唱した人物としては、一般的には郭沫若の方が有名だが、彼の論は毛沢東の影響から来たものであり、毛沢東による曹操評価こそが、魯迅と並んで曹操再評価の大きなきっかけとなったという面を見逃してはならないだろう。

現在の中国における曹操評価は非常な多面性を見せている。学界における様々な曹操への評価は言うまでもなく、文学や京劇などの芸術的な面から曹操を悪の典型として研究する傾向や、『厚黒学』を先駆とする、乱世の成功者としての曹操を現代の実生活に生かそうとするビジネス書の隆盛、そして『演義』を題材とした数多い映画やテレビドラマにおける様々な曹操の描かれ方など、その方向性は多岐に渡る。これらの中には毛沢東による曹操評価を引用し、そこから論を進めるものも少なくなく、その影響は未だに大きい。また、これらに引用される毛沢東の曹操観は肯定的なものである場合が殆どであり、毛沢東が曹操を否定的に評価した事実があることは余り知られていないのではないと思われる。しかし、ドラマ『三国演義』⁷⁰に登場した、「英雄」「悪人」といった単純な枠組みでは定義できない、従来とは異なる曹操を演じた鮑国安が高い人気と圧倒的支持を得て、「飛天奨」「金鷹奨」の最優秀主演男優賞を獲得した⁷¹ように、嘗ての批林批孔期のような、政権の提示する曹操像への全面賛同というような傾向は現在では特に認められない。政権による曹操像が政治的言説の道具であり続けることは当然今後も大きくは変わらないであろうが、現在ではそ

れも数多い曹操像の中の一つに過ぎないものとなりつつある。曹操評価という事象は、中国における言論の在り方の一端を見せてくれるものであるとも言えるだろう。

[注]

- (1) 『三国演義』とも言う。正史『三国志』(後述)を元に、羅貫中が編んだとされる小説。以後『演義』と略称する。
- (2) 前近代の曹操観は別の機会に述べるが、前近代における曹操は一般に悪人と評されることが多かったとされる。後世の曹操観に強い影響を及ぼした東晋の習鑿齒や南宋の朱熹による曹操への批判は、自らの政権を中原から追った少数民族を曹操になぞらえ憎んだことから来ているという。また、胡適が「魔力」と例えた(胡適「答錢玄同書」)程に悪人としての曹操像を広く定着させた『演義』は、作中で曹操を悪と描くことで元王朝を暗に批判する意図が見て取れる。清代になると、乾隆帝は『四庫全書』編纂中、曹操を讃えた北宋の穆修の詩を読み「其の奨募助逆、名教に背くという可し」と激怒しており、曹操を逆臣の代名詞として貶した意図が見て取れる。以上のように、前近代において曹操は、異民族政権を批判する暗喩として、或いは権力者にとっての憎むべき逆臣の代名詞としての政治的道具という性格を持っていた。
- (3) 1927年、広州夏期學術講演会で魯迅の行った講演で、曹操を高く評価したことで有名。魯迅の真の意図は別にあったとされるが、それについては別の機会に述べる。
- (4) 中共中央文献研究室編『毛沢東讀文史古籍批語集』(中央文献出版社、1993年)、唐漢・振肖主編『毛沢東評点中国皇帝』(紅旗出版社、1998年)、盛巽昌編『毛沢東与三国演義』(広西人民出版社、1997年)、曲一曰『毛沢東評說中国文学』(吉林人民出版社、1998年)、景有権・遅力『毛沢東評說中国歴史』(吉林人民出版社、1998年)、代凱軍『毛沢東眼中的曹操与三国』(新疆人民出版社、2001年)、毛伝兵ほか編『毛沢東讀批《資治通鑑》』(紅旗出版社、1998年)、張貽玖『毛沢東讀史』(中国友誼出版公司、1991年)、李雲『毛沢東評点《三国演義》』(青海人民出版社、1998年)など多数。
- (5) 宋培憲「毛沢東与《為曹操翻案》」『人民日報』ホームページ2000年1月28日。
(<http://www.peopledaily.com.cn/digest/199910/200001/21/js2106.html> 2000年6月3日現在。)
- (6) 尾鷲卓彦「歴代の文人たちは「三国志」をどう読んだか」『文人の眼』第5号、里文出版社、2002年11月、6-15頁。
- (7) 蕭瑜『我和毛沢東的一段曲折經歷』昆侖出版社、1989年、4-10頁。
- (8) エドガー・スノウ著・宇佐美誠次郎訳『新版中国の赤い星』(筑摩書房、1964年初版、95頁)。ここでいう三国志とは小説としての『三国演義』であろう。
- (9) 陳寿(233-297)の記した、後漢末から三国時代を扱った正史。本論文では陳寿撰・陳乃乾校訂『三国志』(全5冊)中華書局、1998年発行の第14刷版(1959年初版)を参照する。尚、曹操に関する主要な記述は『三国志』卷一・武帝紀にある(武帝は彼の諡号)。
- (10) 盛巽昌編『毛沢東与三国演義』広西人民出版社、1997年、15-16頁。
- (11) Terrill, Ross. *Mao. A Biography*. New York: Harper & Row, 1980. 劉路新等訳。
- (12) 前掲『毛沢東与三国演義』、2頁。
- (13) 毛沢東「致蕭子升信」中共中央文献研究室・中共湖南省委《毛沢東早期文稿》編輯組編『毛沢東早期文稿』湖南出版社、1990年、51頁。
- (14) 張健等『毛沢東的軍事芸術』山東大学出版社、1991年。ここでは前掲『毛沢東与三国演義』、18頁を参照している。毛沢東のこの発言は、諸

- 葛亮が東南の風を祈った話（『演義』49回）と濃霧を利用し10万本の矢を得た話（『演義』46回）を混同していると思われる。
- (15) 抗日戦争中最大規模の国共の武力衝突として知られる。蒋介石が安徽省南部の茂林で新四軍に攻撃を加えほぼ壊滅に追い込んだ事件で、西安事件をきっかけとした国共合作以後の反共攻勢の開始である。
- (16) 忻中「毛沢東晩年の読書生活」、『党史文匯』1994年第9期。ここでは前掲『毛沢東与三国演義』、38-41頁より要約。
- (17) 徐庶は、諸葛亮らと親交のあった名士で、劉備に仕えていたが母が曹操の人質となったので曹操の元に赴いた（『三国志』卷三十五・諸葛亮伝）。『演義』では、徐庶は劉備に暇乞いする際に、曹操に仕えようと生涯彼の為には献策しないことを誓っている（『演義』第36回）。上記『人民日報』の言説は『演義』を踏まえたものであることが分かる。
- (18) 花淳「上党平漢戦役放下武器之国民党軍 千余尉級軍完返郷臨行表示：不再作戦的犠牲品」『人民日報』1946年6月3日。
- (19) 張貽玖『毛沢東読史』中国友誼出版公司、1991年、82頁。
- (20) 「亀雖寿」の全文は以下の通り。「神亀雖寿、猶有竟時。騰蛇乗霧、終為土灰。驥老伏櫪、志在千里。烈士暮年、壯心不已。盈縮之期、不但在天。養怡之福、可得永年。幸甚至哉、歌以詠志。」（『晋書』卷二十三・樂志下）『晋書』同部分に「樂府詩集五十四では『驥老』を『老驥』と作る」と指摘がある。現在では「老驥」とするのが一般的である。
- (21) 馮彩章等『紅医将領』北京科学技術出版社、1991年。ここでは前掲『毛沢東与三国演義』、66-67頁より要約。
- (22) 「歩出夏門行」とも言う。曹操が袁一族を討伐し碣石山に至った時に、その雄大な眺めと自らの志を詠んだもの。「觀滄海」「冬十月」「河朔寒」「龜雖寿」の四解から成る。
- (23) 華英『毛沢東的兒女們』中外文化出版公司、1989年、189頁。
- (24) 全文は以下の通り。「東臨碣石、以觀滄海。水何澹澹、山島竦峙。樹木叢生、百草豐茂。秋風蕭瑟、洪波湧起。日月之行、若出其中。星漢燦爛、若出其裏。幸甚至哉、歌以詠志。」（『晋書』卷二十三・樂志下）
- (25) 京劇における曹操は「白臉」（白い顔）として登場する。詳細は別の機会に述べるが、これは悪人・奸臣の象徴であり、「曹操は白臉の悪人」という表現が非常に多いことを見ても、この概念がいかに普及していたかが分かる。
- (26) 「浪淘沙・北戴河」は曹操の「碣石篇」を踏まえ毛沢東が詠んだもので、全文は以下の通り。「大雨落幽燕、白浪滔天、秦皇島外打漁船。一片汪洋都不見、知向誰邊？往事越千年、魏武揮鞭、東臨碣石有遺篇。蕭瑟秋風今又是、換了人間。」（『毛沢東詩詞集』中央文獻出版社、1996年、92頁。）この詩は近年放映されたドラマ『開国領袖毛沢東』（中央電視台2000年、楊光遠監督、唐国強主演）のエンディング主題歌の歌詞としてそのまま使用されている。
- (27) 以上、毛沢東と徐涛の会話から「浪淘沙・北戴河」を詠んだ下りまでは、前掲『毛沢東与三国演義』、69-71頁より要約した（初出は権延赤『紅牆内外』昆侖出版社、1989年）。
- (28) 孫宝義『毛沢東的読書生涯』知識出版社、1993年、224頁。
- (29) 『社会科学論壇』1995年第1期。ここでは前掲『毛沢東与三国演義』、81頁より要約。
- (30) 李越然『外交舞台上的新中国領袖』解放軍出版社、1989年、151頁より要約。
- (31) 劉李勝等訳『毛沢東的思想』中央文獻出版社、1990年、184頁（原著はStuart, Schram. *The Thought of Mao Tse-Tung*. Cambridge. 1989）。ここ

- では前掲『毛沢東与三国演義』, 100頁を参照。
- (32) 陶魯筋『一個省委書記回憶毛主席』山西人民出版社, 1993年, 144-145頁。
- (33) 忻中「毛沢東晩年の読書生活」 初出『党史文匯』1994年第8期。ここでは前掲『毛沢東与三国演義』, 101頁を参照。
- (34) 張魯（生没年不詳）は、五斗米道を開いた張陵の孫で、三代目教祖として30年に渡り漢中に独立勢力を築き、その教義に従った統治を行った。215年曹操の攻撃に対し降伏し、重く用いられた。
- (35) 中共中央文献研究室編『毛沢東読文史古籍批語集』中央文献出版社, 1993年, 142-148頁。
- (36) 郭嘉（170-207）は曹操の最も愛した謀士とされる。曹操の北方平定などに功績が大きかったが、38歳の若さで病死した。
- (37) 薄一波「崇拜和懷念——回憶毛沢東同志」『領袖・元帥・戰友』中共中央出版社, 1992年。ここでは、前掲『毛沢東与三国演義』, 125-126頁を参照。
- (38) 彭程・王芳『廬山・1959』, 解放軍出版社, 1988年, 52-55頁。
- (39) 李銳『廬山會議実録』河南人民出版社, 1994年, 72頁。
- (40) 陶魯筋『一個省委書記回憶毛主席』山西人民出版社, 1993年, 138頁。
- (41) 郭沫若「序」郭沫若編著『蔡文姬』文物出版社出版, 1959年, 1頁。
- (42) 自身も農民蜂起軍出身者を多く含んでいた共産党政権は、中国歴史上に起こった農民蜂起を「起義」と呼び、その義挙を賞賛する。従って、歴代農民蜂起を賞賛することは建国以後の国是であり、黄巾軍の鎮圧に当たった曹操を高く評価する際、曹操と黄巾の両立は歴史学者達にとって大きな難題となった。郭沫若は曹丕が魏を建国した際に定めた年号「黄初」を、「五行説に基づいたものであるが、黄巾の『黄巾当立』とも通ずる所が無いか？」と指摘し、曹丕の父曹操が黄巾運動を継承した根拠に挙げている（前掲『蔡文姬』, 8頁）。
- (43) 新華社「中国文化界名流著文 抨擊美国助蔣打内戰 反对予美最後決定權 郭沫若先生說：我們恨那些借刀殺人的曹操！」『人民日報』1946年7月11日。
- (44) 翦伯贊「應該替曹操恢復名譽」『光明日報』2月19日。
- (45) 李希凡「《三国演義》和為曹操翻案」『文芸報』1959年第9期, 15-21, 30掲載。
- (46) 譚其驤「論曹操」『文匯報』1959年3月31日掲載。ここでは三聯書店編輯部編『曹操論集』生活・読書・新知三聯書店出版, 1960年, 64-78頁を参照。
- (47) 前掲『曹操論集』の冒頭にある「編者的話」による。
- (48) 『党的文献』1994年第5期。ここでは前掲『毛沢東与三国演義』, 133頁を参照。
- (49) 趙志超『毛沢東和他的父老鄉親』湖南文芸出版社, 1992年, 239頁。
- (50) 『社会科学論壇』1995年第1期。ここでは前掲『毛沢東与三国演義』, 141頁を参照。
- (51) 陳晋『毛沢東与文芸伝統』中央文献出版社, 1992年, 243-244頁。
- (52) 王年一『大動乱的年代』河南人民出版社, 1988年, 393頁。毛沢東の引用した故事の内容は以下の通り。「孫権が曹操に書状を送り、自らを臣と称し『天命は既に漢から移っている』と説いた（『演義』では、帝位につくように明確に勧めている）。曹操は『小わっぱめ、私を炉の火の上に座らせるつもりか』と言うと、陳羣・桓階が上奏し『辞退することのないように』と勧めた」（『三国志』卷一・武帝紀注『魏略』）『演義』第78回において、曹操が間もなく死を迎える場面にも同様の故事が採用されている。
- (53) 産経新聞「毛沢東秘録」取材班『毛沢東秘録』

- 〈下〉』扶桑社、2000年、88－92頁。
- (54) 代表は毛宗崗の評で、『演義』第78回に見える曹操の「天命が儂にあらうと、儂は周の文王になろう」という言葉に「隱然以篡逆之事留与曹丕」（暗に篡奪を曹丕に残し委ねている）という注釈をしている（宋祥瑞等編『三国演義会評本』北京大学出版社、1998年、956頁）。
- (55) 董克昌「論曹操的尊法反儒」（『学習与批判』上海人民日報社、1974年第7期、29－34頁）、安徽師範大学中文系写作組「論曹操的法家路線」（『歴史研究』人民出版社、1974年第1期、83－90頁）、唐長孺「論曹操法家路線的形成」（『歴史研究』1975年第1期、113－119頁）、劉光「曹操法家路線形成的歷史条件」（同誌、120－123頁）、首鋼機械廠工人歴史研究小組北京師範学院高軍「対曹操屯田的幾点看法」（同誌、124－126頁）など。
- (56) 翟青「読《三国志・郭嘉伝》」（『学習与批判』1974年第9期、15－18頁収録）。
- (57) 荀彧は、袁紹を見限り、弱小勢力だった曹操を見込んで仕えた人物。曹操の軍師として並ぶ者の無い功績を挙げ、特に官渡戦において許昌の留守を守った功なくして曹操の勝利は有り得なかった。人望も厚く、曹操との君臣関係は理想的に見えたが、曹操が魏公になることに反対し曹操の不興を買い、その死について史書は「以憂薨（憂悶のうちに死去した）」（『三国志』卷十・荀彧伝）と記す。この曖昧な記述には古来多くの推測が為され、『演義』での荀彧は曹操の意を悟り自害している（61回）が、これは荀彧伝注『魏氏春秋』に見える記述である。
- (58) 韓強「關於荀彧的死和他的政治傾向」（『学習与批判』1975年第6期、72－74頁収録より要約。同文は読者投稿である）。
- (59) 「思想上・政治上の路線が正確か否かは全てを決定する。曹操と同時に起こった袁紹・袁術・劉表等の軍閥は曹操よりも実力があつたが、いずれも滅亡という末路を免れ得なかった。その原因は彼らの政策が分裂割拠・後退的なものだったからである。特に袁紹が曹操に敗れたことは、正確な路線が反動路線を打ち破るという生き生きとした例証である。」（前掲「論曹操的法家路線」、85頁より要約）ゴシック部分は一般に毛沢東の著書や語録等の引用であることを意味する。上述の例は、曹操の勝利と袁紹の敗北という事実を毛沢東の思想の正しさの証明としているのである。
- (60) 盧湾区工宣辦《曹操的故事》編写組編『曹操的故事』上海人民出版社、1975年、3頁より要約。
- (61) 蘆獲「毛沢東談二十四史」（『光明日報』1993年12月20日）。
- (62) 譚宗級『十年後的評説－“文化大革命”史論集』中共党史資料出版社、1987年、308頁。
- (63) 牧陽一・松浦恆男・川田進『中国のプロパガンダ芸術』岩波書店、2000年、278頁。
- (64) 新華社「唐家璇外長在九届全国人大二次会談举行的記者招待会上就国际形成和中国外交政策等答記者們」（『人民日報』1999年3月8日）。
- (65) 章炳麟「魏武帝頌」（『雅言』第1年第7期・上海右文社、1914年7月10日、「文芸 文録」、1頁）。
- (66) 中央電視台作品、1991年7月撮影開始、1994年1月30日撮影終了、1994年10月23日放映開始、全84話。総監督：王扶林。監督：蔡曉晴・張紹林・孫光明・沈好放・張中一。主演：鮑国安（曹操）、孫彦軍（劉備）、唐国強（諸葛亮）ほか。本論文ではVCD版（深圳市先科娛樂傳播有限公司出品、深圳市激光出版發行公司出版發行、深圳深飛激光光学系統有限公司製造、全58枚。ISRC CN-F27-98-340-00/V.J9）を参照。
- (67) 雅文等「一年碩果滿枝頭」（『人民日報』1995年12月31日掲載）。